

# 歴史館だより

No.128

2025.9.30  
茨城県立歴史館

## 目次

- 1 展示紹介 企画展「出産と育児のあれこれ」／アーカイブズの部屋関連 開業 20 周年を迎えたつくばエクスプレス／一橋徳川家記念室展示「一橋徳川家資料にみる文様」／企画展「博物館でツーリズム!!」／昔の暮らし「モノ×語り」
- 2 史料紹介 「書状（松岡表安否伺）」「高橋渡肖像」
- 3 トピックス 令和 7 年度 上半期の教育普及事業



## 展示紹介 1

# 企画展「出産と育児のあれこれ」

令和7年10月4日（土）～11月24日（月・振）

### ■展示概要

少子化が社会問題として注目されるようになり 30 年以上が過ぎました。近年は、労働力不足などの形で、その影響を実感するようになってきています。一方、子育ての当事者たちが抱える課題は、分娩施設の不足や家事・仕事との両立、経済的、精神的な負担など多岐にわたります。出産と育児は、人類の歴史の中で連綿と続いてきた営みです。現代も課題となるあれこれに、人々はどう向き合ってきたのでしょうか。

本展では、江戸時代から現代までの出産・育児の方法、政治や社会との関わり、そして習俗の変化について、資料を通して紹介します。



### ■各章概要

#### 第1章 出産・育児と社会

江戸時代の後半、日本は人口の停滞期を迎えますが、特に北関東や東北での人口減少は著しく、諸藩では藩政改革の一環に人口政策を位置づけ、間引きの禁止や育子養育金の支給などの施策を行いました。近代以降は、堕胎が刑法により犯罪に規定される一方、大正時代末からは、マーガレット・サンガーの影響を受け日本でも産児調節運動が広がり、避妊についての議論が行われるようになります。しかし、戦争の時代へと突き進む中で、「産めよ殖やせよ」のスローガンのもとに、国家のために出産が奨励されるようになりました。出産・育児に対して、国家や地域社会がどのように関わってきたのかを資料を通して探っていきます。



御筆之写〔徳川治保 育子の教諭〕

寛政3年（1791）当館



間引き絵馬 年代不明

徳満寺（利根町）

画像提供：利根町教育委員会

## 第2章 出産・育児の現場

エコーなどが無い時代、人々は、胎児の成長の様子をどのように捉え、どのような知識をもって産前・産後を過ごし、出産に臨んだのでしょうか。また、乳幼児の世話は誰が、どのように担ってきたのでしょうか。出産・育児に関する書物や助産器具、育児用品などのモノを通して、その実態を探ります。



女重宝記三之巻 元禄5年(1692) 当館



助産器具 昭和時代 個人



愛国婦人会茨城県支部新治郡  
中家村農村託児所絵葉書  
昭和2年(1927) 当館



えじこ 年代不明 当館

## 第3章 出産・育児の習俗

安産を祈願する帯祝いや、成長を祈願するお宮参り、七五三などは、今日も広く続けられています。出産・育児をめぐるさまざまな習俗は、社会の変化によってその姿や意味を変えてきました。本章では、地域の安産と成長の祈りの場であった子安講、みつめのぼたもちやオビアキの風習、産の忌みをめぐる慣習などを中心に、出産・育児にまつわる習俗とそこに込められた願いを紹介します。



写真「河和田の子安講」藤田稔撮影  
昭和46年(1971)頃 当館



えなつぼ 年代不明 当館

## ■関連行事

### (1) 日曜歴史館「近世の育子策と間引き教諭」

日時：10月5日（日） 14:00～15:30

会場：茨城県立歴史館 講堂

講師：廣瀬昌子（当館首席研究員）

定員：150名（先着順・事前申込制）

### (2) ギャラリートーク

日時：10月18日（土） 11:00～/14:00～（各回同一内容、約30分間）

会場：茨城県立歴史館 第3展示室（1階）

担当：廣瀬昌子（当館首席研究員）

申込：事前申込不要 要入館券



### (3) 背守りワークショップ

日時：10月26日（日） 13:30～15:30

会場：茨城県立歴史館 講堂

講師：茨城県立水戸第三高等学校家政科

内容：水戸三高生徒による背守りに関するミニ講義および背守り刺繍体験

定員：20名（先着順・事前申込制） ※未就学児の託児あり（無料）

### (4) 関連講座「出産と子育てー明治から昭和の茨城ー」

日時：11月1日（土） 14:00～15:30

会場：茨城県立歴史館 講堂

講師：元厚生労働省看護研修研究センター主任教官 額賀せつ子氏

定員：150名（先着順・事前申込制）

（史料学芸部 学芸課 首席研究員 廣瀬昌子）

## 展示紹介 2

### アーカイブズの部屋（令和 7 年 10 月 4 日（土）～11 月 24 日（月・振））関連 開業 20 周年を迎えたつくばエクスプレス

令和 7 年(2025)は、茨城県南西部の発展に大きな影響をもたらしているつくばエクスプレスの開業から 20 周年を迎えます。本号では、当館が所蔵する資料を通じて、その歩みを振り返ります。

#### 1 つくばエクスプレスとは

平成 17 年(2005) 8 月 24 日、茨城県民の期待を一身に受け、つくばエクスプレスが開業しました。つくばエクスプレスは、常磐線の混雑緩和を図る目的から、当初は第二常磐線とも呼ばれ、常磐新線の名称で建設が進められました。完成後の運営は J R 東日本が予定されていましたが、途中で方針が転換され、建設主体であった第三セクター会社の首都圏新都市鉄道による開業となります。開発目的も、常磐線の混雑緩和から沿線開発へと変化し、鉄道整備と沿線の新しいまちづくりの一体化が進められています。

▽つくばエクスプレス（秋葉原・つくば間 58.3km）開発のあゆみ

- 1978（昭和 53） 茨城県、常磐新線構想を発表（第二常磐線）
- 1985（昭和 60）. 7 運輸政策審議会答申に於いて、東京・守谷間を「2003 年までに整備すべき路線」と、守谷・筑波学園研究都市間を「整備の方向を検討する路線」と位置づけ
  - . 12 常磐新線建設促進関係都県連絡協議会、沿線 1 都 3 県知事により設置
- 1987（昭和 62）. 9 常磐新線整備検討委員会、運輸省、1 都 3 件、J R 東日本により設置
- 1988（昭和 63）. 11 秋葉原・筑波学園研究都市間を当面の建設区間とし、第三セクター会社が建設主体となり、完成後は J R 東日本が運営の方針に決定
- 1991（平成 3）. 3 建設主体となる第三セクター会社、首都圏新都市鉄道株式会社設立
- 1992（平成 4）. 1 首都圏新都市鉄道が完成後も運営を行うこととなり、鉄道事業法に基づく第一種鉄道事業免許取得
- 1994（平成 6）. 10 秋葉原において常磐新線起工式
- 2001（平成 13）. 2 つくばエクスプレスに鉄道路線名称が決定
- 2005（平成 17）. 8 秋葉原・つくば間開業

## 2 資料紹介

当館閲覧室では、表題に「常磐新線」<sup>タイトル</sup>「第二常磐線」を含む刊行物 120 点余りを公開しています。以下の 6 点からつくばエクスプレスの歩みを考えてみます。以下（ ）は請求番号

### ① 第二常磐線と地域開発に関する調査概要 昭和 59 年（行刊 84－52）

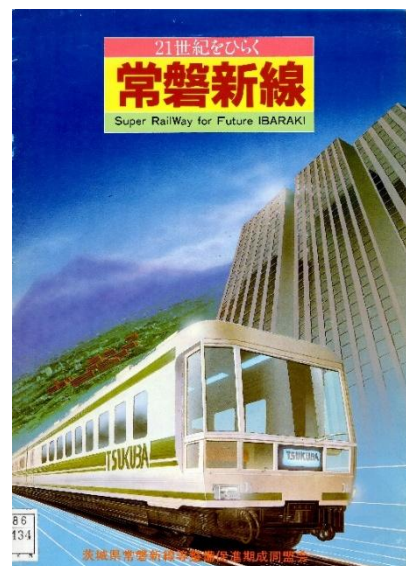
茨城県は、昭和 58 年度に「第二常磐線と地域開発に関する調査研究会」を設置します。これは、将来の県南・県西地域の開発整備のあり方とこれと整合した第二常磐線の深度化を図るために、専門的な調査研究を委託したものです。この刊行物は報告内容の概要版です。

### ② 21 世紀をひらく常磐新線 昭和 61 年（行刊 86－434）

県の企画部鉄道交通課内に「茨城県常磐新線等整備促進期成同盟会」の事務局がおかれます。資料は地元住民の理解と協力を得るために期成同盟会の事業を紹介したパンフレットです。常磐新線は混雑を極める常磐線の混雑緩和の決め手であり、昭和 75 年(西暦 2000 年)までに学園都市までの路線を整備し、長期的には水戸方面に向かう整備を検討すると示されています。



資料① 第二常磐線と地域開発に関する調査概要



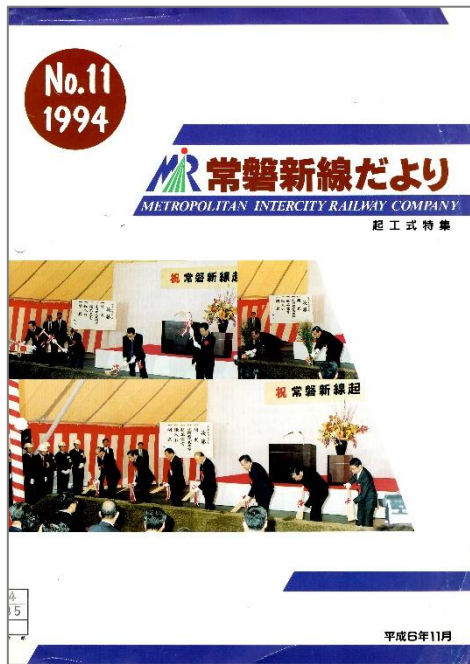
資料② 21 世紀をひらく常磐新

### ③ 常磐新線だより No.11 平成 6 年（行刊 94－1635）

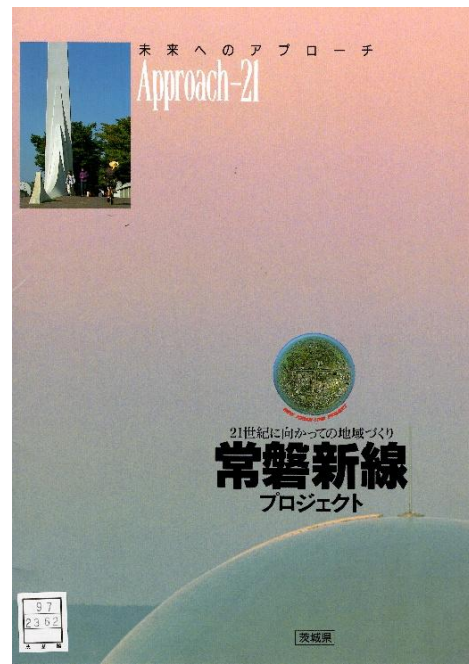
編集・発行は首都圏新都市鉄道株式会社で、11 号は起工式の特集です。平成 6 年 10 月 28 日に J R 秋葉原駅前特設会場で鉄入れ式が挙行されました。挨拶に立った日本鉄道建設公団総裁、首都圏新都市鉄道株式会社社長、運輸大臣や建設大臣らの祝辞を紹介しています。

### ④ 21 世紀に向かって地域づくり常磐新線プロジェクト 平成 9 年（行刊 97－2362）

沿線地域の恵まれた自然環境や歴史・文化との調和を図りながら、快適で魅力ある職場が確保され、安全で文化性豊かな生活が満喫できる食・住・学・遊の融合した、21 世紀にふさわしい真の豊かさを実感できる地域づくりのため、常磐新線プロジェクトはスタートすると述べられています。



資料③ 常磐新線だより No.11



資料④ 21 世紀に向かって地域づくり  
常磐新線プロジェクト

### ⑤ つくばエクスプレス 平成 15 年（行刊 2003－1078）

つくばエクスプレスの名称、ロゴが掲出され、平成 17 年秋の開業、秋葉原・つくば間を最速 45 分で結ぶことが明らかにされています。車両、駅名も具体的に紹介されています。開業が近づいてきたことを知らせるパンフレットです。

### ⑥ つくばエクスプレスだより 2005AUTUMN VOL. 50 平成 17 年（行刊 2005－332）

平成 17 年 8 月 22 日の発車式・しゅん工開業式、8 月 24 日の開業式についての特集です。開業直前の 18 日に皇太子さま（現在の天皇陛下）、開業日には小泉純一郎首相が TX にご乗車されたことがトピックスとして扱われています（右記事）。



**■開業直前のTXに皇太子さまも試乗**

皇太子さまは8月18日午前、情報技術の拠点として急ピッチで再開発が進む東京都千代田区の秋葉原駅周辺を視察されました。開業直前の「つくばエクスプレス」に試乗。秋葉原―北千住間を往復されました。試乗中、高橋社長によるTXの説明に、熱心に耳を傾けておられました。

皇太子さまは、情報機器の展示や産学連携の拠点として3月に開業した地上31階の秋葉原ダイビルを訪問し、入居する東大大学院情報理工学系研究科で最先端の研究などの説明を受けられました。

**■開業日に小泉首相もTX乗車**

小泉純一郎首相は24日、開通したばかりの「つくばエクスプレス」の乗り心地を楽しみました。

秋葉原駅から北千住駅までわずか10分間だけでしたが、乗り合わせた親子連れに「どこまで行くの」と話しかけたり、写真撮影に応じたりしました。秋葉原の電気街も視察。家電量販店で外国製の薄型テレビなどを見て回り、約7000人の聴衆を前に街頭演説を行いました。

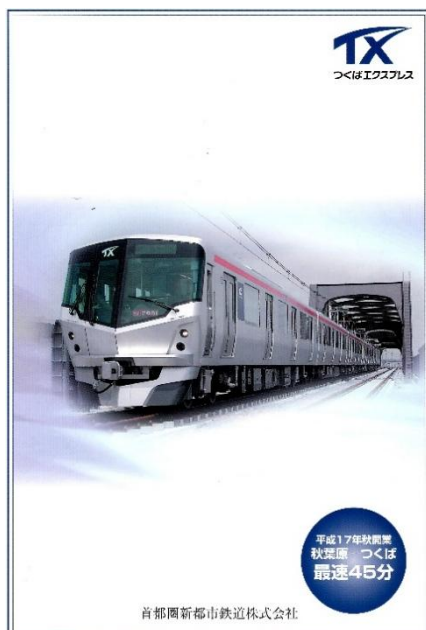


## 3 開業式前後の様子

当館の記録によれば、開業を数日後に控えた同年 8 月 17 日に「つくば駅南北自由通路開通式及びパブリックアート情報端末除幕式」がつくば駅で開催されました。つくば駅は地下

駅であり、開通式当日が一般県民に対しての初のお披露目となりました。式典は、橋本昌県知事（当時）や市原健一つくば市長（当時）の挨拶の後、テープカットやくす玉割りなどの催しが行われました。

同月 24 日が TX 開業日です。午前 5 時 7 分のつくば発秋葉原行きの始発電車の出発に先立ち、午前 4 時から「つくばエクスプレス出発式」が開かれました。関係者にはパンフレットや鉛筆等の記念品が配られました。



資料⑤ つくばエクスプレス



資料⑥ つくばエクスプレスだより  
2005AUTUMN VOL. 50

出発式では、当時の角田芳夫副知事や市原つくば市長、茨城県出身の女優羽田美智子さんらによるテープカットがあり、乗務員への花束贈呈等が行われました。

また、秋葉原からの一番電車が到着する 6 時 27 分頃からは到着式が行われ、亀城太鼓の演奏の中、開業記念のうちわやボールペン、シール等が乗客に配布されました。

新聞社・放送局の取材陣も数多く集まり、朝日新聞つくば支局からは「つくばエクスプレス記念号外」が発行されるなど、マスコミの関心も高いようでした。

県立歴史館は、文書館と博物館の二つの機能を有する施設として設置され、それからすでに 50 年を超えております。これまでに当館が収集した文書史料、行政資料、図書等は 50 万点を超えています。本号で紹介した刊行物は、当館閲覧室でご覧いただくことができます。

閲覧室のご利用方法は、下のリンク先をご参照ください。

（閲覧室のご案内） <https://rekishikan-ibk.jp/archives/reading-room/>

（史科学芸部 行政資料課 資料調査専門員 富田任）

## 展示紹介 3

# 一橋徳川家記念室展示「一橋徳川家資料にみる文様」<sup>もんよう</sup>

令和7年11月1日（土）～12月21日（日）

### ■展示概要

今秋、当館としては初めてとなる「文様」をテーマとした展示を開催いたします。

「文様」というと、どのようなものをイメージするでしょうか。イスラム建築を彩るアラベスク文様、日本では勾玉文様とも呼ばれているペイズリー文、あるいはラーメンの器の縁を廻る雷文——。世界中には多種多様な文様が溢れています。

こうした文様文化は、日本においても独自性をもって発展してきました。その文様を見てみると、水の流れや雲の動きといった自然風景、花や鳥といった動植物、あるいは扇や車輪がイメージの源泉になっていることがうかがえます。古来より、日本人々は四季折々の風情を愛で、そこで培われた繊細かつ豊かな感性をもって和歌を詠んできました。そうした身の回りの風光を言葉ではなく図様で表現したものが、まさに日本の文様であると言えるでしょう。

また、中世以降、文様は自らの出自を示す家紋としても発展していきました。一橋徳川家資料の中には、徳川家を象徴する葵紋のほか、公家から降嫁した女性たちの婚礼道具に施された菊紋などが確認できます。ここでは、個人や集団を示す印を「紋様」と表記しますが、これらの紋様も、日本の文様文化における特徴の一つです。

こうした文様・紋様は、時に身に纏う染織品に、時に身の回りを飾る調度品に施され、人々の生活を彩るものでした。本展では、一橋徳川家に伝来した器物類から、長い歴史をかけて生み出された多種多様な文様表現を見ていきます。

以下、主な出陳作品から、一橋徳川家資料における文様的一端をご紹介します。

（※都合により、展示作品が変更になる場合があります。）

### ■各章概要

#### 序章 多様な文様



綾地亀甲丁字唐花打板瑞雲文段唐織

作品名には、色や技法の他、文様についての情報が含まれていることがあります。この唐織の作品名に確認できる文様は、「亀甲」「丁字唐花」「打板」「瑞雲」。これだけでも多く感じられますが、ここで列記したのは主体となる文様（主文）だけです。よく見ると、それぞれの主文の下地に別の文様（地文）として山道文や檜垣文があらわされていることが分かります。

江戸時代後半から明治時代にかけて制作されたと考えられるこの唐織は、日本において多様な文様が生み出されてきたことを物語っています。

## 第1章 有職文様

本来は博識<sup>ほうしき</sup>という意味であった「有職」は、後に公家の礼儀作法を指すようになりました。このうち、有職文様とは公家の服飾や調度品などに用いられた伝統的文様のことを言います。源流となるのは、正倉院宝物などに見られる、奈良時代に唐から入ってきた文様ですが、そのうち強烈なものや緻密なものは敬遠され、やがて温和で優美な文様になっていきました。

本章では、一橋徳川家資料に伝来した染織品から、立涌文、八藤文、菱文などを紹介します。



黄綾地鳳凰唐花丸文散袴衣  
(部分)



薄縹綾地八藤文散袴  
(部分)

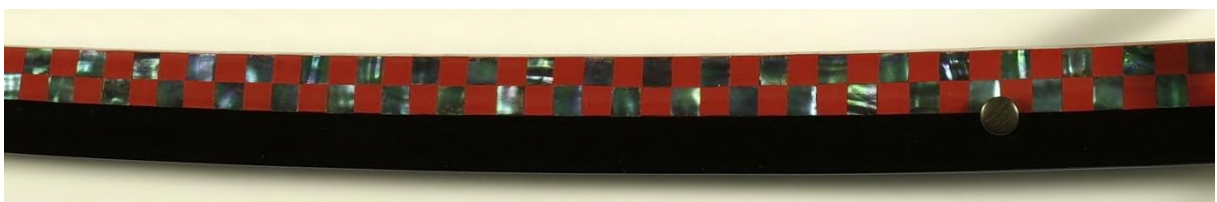
## 第2章 幾何学文様

文様の中には、直線や曲線、四角形や円を組み合わせただけの非常にシンプルなものがあります。むしろ、文様全体を見渡すと、こうした無機質なものが多いかもしれません。

ここでは、亀甲文や雷文、石畳文や七宝繋ぎ文といった、簡素だけど愛着のある、現代でも用いられることが多い文様について見ていきます。



青海波蒔絵水鳥文螺鈿細太刀拵 (部分)



朱塗螺鈿石畳文脇差拵 (部分)

### 第3章 花鳥・器物文様

文様の中には、自然風景ではなく、身の回りの花や鳥、あるいは器物を抽象化して表現されたものもあります。下の二つの懐紙挟のうち左側には車輪の文様が、右側には扇の文様を取り入れられています。また、扇の文様には末広りの形から発展、拡大の意味も込められており、こうした吉祥文様も人々に多く愛されてきました。

ここでは、梅や藤、蝶といった花鳥、車輪や扇、瓢箪などが抽象化した図様としてあらわされた文様をご紹介します。



懐紙挟



懐紙挟

### 第4章 紋様



叢梨子地葵紋散蒔絵食籠（部分）

文様の中には、家紋のように自身が所属する集団を示す「紋様」があります。一橋徳川家資料のなかには、徳川家の家紋である三つ葉葵紋の他、公家から嫁いだ人物の婚礼調度品にあらわされた菊紋などが確認できます。一方で、中には正式な家紋の代わりとなる「替紋」もあったようで、その所有者を示すかのように器物類に記されている例もあります。

ここではそうした替紋も交えつつ、一橋徳川家の紋様についてご紹介いたします。

（史料学芸部 学芸課 学芸員 薮政人）

## 展示紹介 4

# 企画展「博物館でツーリズム!!－江戸時代の旅日記をたどる－」

令和7年12月9日（火）～令和8年1月25日（日）

## ■展示概要

旅が大衆化した江戸時代、常陸国や下総国（現在の茨城県域）からも多くの人々が日本各地に旅立ち、また当地にも多くの旅人が訪れました。その目的は、寺社参詣、名所旧跡めぐり、巡礼、湯治など自発的なものだけではなく、藩の御用、随行、従軍など非自発的なものまで様々でした。これらの旅の様子は、当時の旅人たちが書き残した旅日記によって知ることができます。

本展示では、旅を「住む土地を離れて一時他の場所に行くこと」と幅広くとらえ、茨城ゆかりの旅日記を中心に、旅行案内書や地誌、絵図や絵画などの関連資料とともに紹介していきます。

茨城ゆかりの旅人たちは、日本各地でどのような体験をしてきたのでしょうか。逆に茨城を訪れた旅人たちは、旅先としての茨城をどのようなまなざしで見ていたのでしょうか。江戸時代の旅人たちの体験や見た情景に思いを馳せながらご覧いただければ幸いです。

## ■各章概要

### 第1章 西国へ向かう旅

本章では、江戸時代に大流行した伊勢参宮や西国巡礼の旅、地理学者・長久保赤水の長崎への藩御用の旅など、西国方面への旅日記をご紹介します。茨城県域から西国方面をめざす場合、多くの旅人は往路で東海道を利用しました。その東海道五十三次を題材にした工芸品なども併せて展示します。



長久保赤水「長崎行役日記」 当館



関沢政英「西国巡礼旅日記」 当館

### 第2章 陸奥<sup>みちのく</sup>へ向かう旅

本章では、多くの歌人や俳人が憧れた松島への旅、出羽三山への巡礼の旅、水戸藩士・小宮山楓軒の湯治の旅、探検家・間宮林蔵の樺太の旅など、陸奥方面への旅日記をご紹介します。そのなかで、茨城県域から陸奥へ向かう旅人が利用することの多かった岩城相馬街道の

道中の様子についても触れていきます。また、陸奥を訪れた旅人の多くが立ち寄った松島や勿来関を題材にした絵画や工芸品なども併せて展示します。



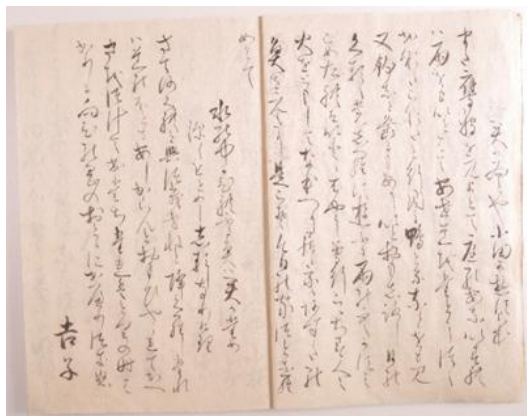
間宮林蔵「東轅紀行」 当館



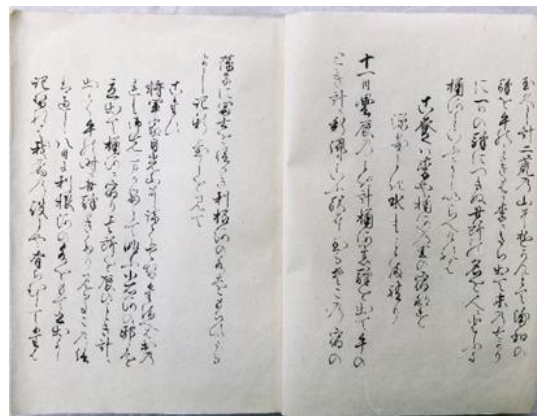
立原杏所「松島御島晩秋図」 当館

### 第3章 江戸近郊の旅

本章では、1ヶ月以上を要した西国への旅や陸奥への旅に対し、藩主夫人と奥女中らで出かけた隅田川の花見など江戸市中の日帰り旅と、江戸から10日前後で往復できる庶民の大山参詣や水戸藩主・徳川斉昭の日光社参など、江戸近郊の旅日記をご紹介します。また、江戸の名所を描いた双六などの資料を併せて展示します。



登美宮吉子 他「隅田川御道之記」



徳川斉昭「水戸黄門斉昭卿日光御道之記」

### 第4章 茨城をめぐる旅

本章では、鹿島・香取・息栖の東国三社をはじめとする利根川下流域、八溝山や佐白山などを含む坂東三十三観音札所、水戸や太田など、茨城県域が目的地の一つである旅日記をご紹介します。そのなかで、物忌館・高天原・浮島など近代化の過程で失われたり大きく形を変えたりした場所に注目し、絵画や絵図などの関連資料を併せて展示します。また、利根川下流域の旅に欠かせない舟運についても触れ、船の模型や絵画などを併せて展示します。



成田香取鹿島息栖細見絵図 当館



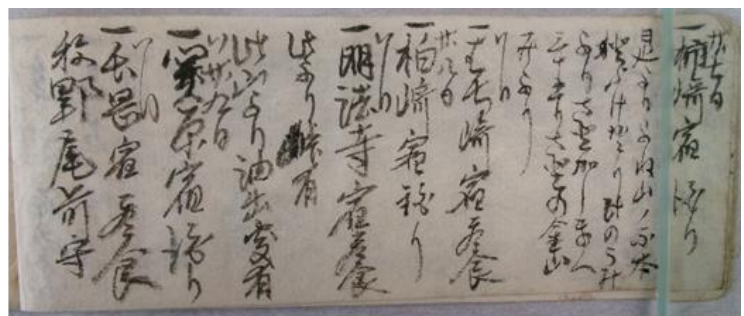
常陸国久慈郡瑞龍山之真図 当館

## 第5章 幕末の動乱と旅

本章では、藩主謹慎に伴う奥女中らの国許水戸への帰国、朝廷への歎願、戊辰戦争に伴う上京や北越への従軍など、幕末の政争や動乱に端を発した旅日記をご紹介します。



黒澤止幾「京都紀行」 当館



鈴木源吾「越後道中覚帳」 当館

(史料学芸部 学芸課 首席研究員 長谷川良子)

## 展示紹介 5

# 昔の暮らし「モノ×語り—民具はがらくたか?—」

令和7年12月9日(火)～令和8年1月25日(日)

## ■開催趣旨

「民具」とは、

「昔から民衆が日常生活に用いてきた道具・器具。」(1981年『広辞苑』第二版補訂版)。

「日常生活の必要から製作・使用してきた伝承的な器具・造形物の総称。民具という語の語感からしてそれは衣食住・生業の用具だけのような印象を与えるが、実際は生活全般にわたるもので、人々が生活の必要から製作・使用してきた伝承的な器具・造形物の一切を含むものである。(後略)」(岩井宏實、2000年『日本民俗大辞典 下』)



と辞書では説明されています。またアチック・ミュージアム(後の日本常民文化研究所)を主催した渋沢敬三(1896-1963)は、日本初の民具調査マニュアルである『民具蒐集調査要目』<sup>1)</sup>の「まへがき」にて、民具を「我々の同胞が日常生活の必要から技術的に作り出した身近卑近の道具」と定義するとともに民具研究は「庶民生活を中心とする文化史の研究上極めて重要な一分科をなすもの」としています。ここでの渋沢による民具の分類は「一、衣食住に関するもの、二、生業に関するもの、三、通信・運搬に関するもの、四、団体生活に関するもの、五、儀礼に関するもの、六、信仰行事に関するもの、七、娯楽・遊戯に関するもの、八、玩具・縁起物」など日常生活や晴れの日を含む多岐に渡り、それらが現在の文化財行政では「有形民俗文化財」と呼ばれ、博物館では「民俗資料」と呼ばれて保存の対象になっています。

しかし、近年は民具の活用と収蔵庫スペース等保存とのバランスの問題や、人員・予算の問題、また時代の変化により「身近卑近の道具」について知る人がなかなかいない、といった状況が現れ、全国的に民具の保存に関する議論が高まっています。令和5年(2023)3月には、東京文化財研究所の主催する第18回無形民俗文化財研究協議会「民具を継承する 安易な廃棄を防ぐために」が開催され、200人以上が参加するなど、全国の民具に携わる研究者、行政関係者がこの問題に高い関心を寄せていること、この議論が必要とされていることが分かります。また、令和6年7月には日本民具学会がHP上にて「民具(有形民俗文化財)の廃棄問題に対する声明」を発表<sup>2)</sup>し、神奈川大学日本常民文化研究所をはじめ17の団体がこれに賛同(令和6年10月15日時点)しています。

日本にたった一つしかないわけでも、珍しいわけでもない。そして「なんか地味」な…民具。どうして、どうやって民具を保存し、活用し、後世に残していくのか、そしてこれから新たな民具を収集する時、どのようなことに気をつけながら抽出していけばよいのか…民具の調査、収集、保存と活用の現場から、当館が「民具の一生」のためにできることを考えていきたいと思います。

## ■展示のトピック

▽「どうして同じものがたくさんあるの？」

と、よくご質問を受けます。こういった時、民具の資料的な特徴として、「群れ」で保存することに意味がある、ということが言えます。

美術工芸品などの文化財とは異なり、民具が「一点もの」であることは稀です。しかし、地域によって、用途によって、家によって、一見同じように見えるものにも様々なバリエーションがあります（これらを研究するために、後述のコト情報（採集地、使用地、年代、使用方法）の記録が大切になります）。民具が各地に「群れ」で保存されていれば、視点を全国（あるいは世界）に広げて、茨城県と他県、関東と東北地方、東日本と西日本、日本とアジア…など地域差を比較してより多くのことが分かるようになります。

一方で、民具はある一定の型やパターンを持って世代を超えて伝承される、という共通性ももっています。「同じものがたくさんある」という事実自体も、大事な情報になりえるのです。農業が盛んな地域には、細かな差異があっても鍬や万能がある、薪を運ぶ為には背負い梯子など運搬器具が必要で、籠や箆はこの家庭でも必要とされる…といったように。また特に工業化によって大量生産が可能になった結果、例えば洗濯機などの電化製品が全国どこでも手に入るようになります。こうした社会的、技術的背景も、同じものがたくさんあるという事実によって裏付けられていきます。

▽民具のモノ情報とコト情報 ―モノ×語り

多世代が一つの家に暮らす例が少なくなり、家財道具も世代間で同じものを引き継いだり、贈ったりすることが少なくなりました。「実家を取り壊すので、展示などで使えるものがあれば」「終活で…」という寄贈の希望を受けます。そうしてお預かりする民具は、民俗資料として、博物館で「第二の人（民具）生」を歩むことになります。しかしそれも、一つの家の暮らしの道具からみればごく一部です。収蔵庫のスペース、茨城県という地方の県立博物館として優先的にお預かりすべきもの、時間的な制約。お預かりする資料の抽出には、難しい判断が必要になります。

民具のモノ情報とは、モノ自身を観察することから分かる、サイズや材質、構造、文字情報や傷などの使用痕のことです。材質や文字情報から、製作場所・年代、使用場所・年代、時には持ち主の人となりまで…分かることもあります。コト情報は、民具そのものを見ただけでは分からない情報で、その民具を使っていた地域や家、人の情報など、使用者やそれを見ていた人の語り、実際に民具を使用するところを観察することから得られます。当館で民

具を収集する際には、モノ情報だけでなく、コト情報を充実させて採集することを心がけています【画像1】。語りの中には、本に載っている一般的な解説からは得られない「え、そんな使い方してたんですか…?」という情報や、当時の社会的・歴史的背景をうかがわせる情報が得られることもあります。本展では直近の収集事例から、この「語り」を音声データあるいは映像として、民具とセットで展示します。

全ての民具に語りがともなって保存されているかというと、そんなことはありません。民俗収蔵庫にはコト情報のない民俗資料もたくさんあります。これには、高度経済成長期、急激な生活の変化に伴って廃棄されつつある民具を、緊急避難的にとにかく保護しなければならないという収集当時の事情もあります。当館の民俗収蔵庫が建設されたのは昭和54年(1979)ですが、当時の書類には民俗収蔵庫設立の理由についてこう書かれています。

「(前略) これらの資料は現在急速に減りつつあり、収集を急がないと永久に失われてしまうため早急に新設する必要がある。」【画像2】



画像1 民具のコト情報の聞き取り  
(2025年3月6日撮影)

| 茨城県歴史館 課                                                                                                                                                |           |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------|
| 施 工 理 由                                                                                                                                                 |           |
| 1. 設置の理由<br>現在の収蔵庫は考古・民俗と<br>二分して使用しているが、すでに<br>余裕がなく資料を収蔵するこ<br>とができません。<br><u>これらの資料は現在急速に<br/>減りつつあり、収集を急が<br/>ないと永久に失われてしまうため<br/>早急に新設する必要がある。</u> |           |
| 着工予定                                                                                                                                                    | 54年 2月 7日 |
| 竣工予定                                                                                                                                                    | 54年 3月 4日 |

画像2 民俗収蔵庫関係書類  
「昭和52年度建築工事概要書」(部分)  
※下線部は森戸

こうしたやむを得ない状況のもと、コト情報がない資料については、文献や他館の事例、または同じようなものを使用したことがある人からの「語り」を集めながら研究していきます。令和7年度の当館の博物館実習では、実習生に、こうした収蔵庫の実態を把握した上で、収蔵庫の整理作業と、コト情報のない資料の展示キャプションの作成を体験してもらいました【画像3, 4】。本展では、これも博物館教育への民具活用の一事例と考え、実習生による民具の展示キャプションをご紹介します。



画像3 民俗収蔵庫での博物館実習  
(2025年8月2日撮影)



画像4 民俗収蔵庫での博物館実習  
(2025年8月2日撮影)

### ▽民具のみせ方ー民具の3D撮影

当館では移り変わる人々の暮らしと民俗資料を「昔の暮らし」の通年展示や、主に小学校3年生の校外学習、そして資料をとまって教室に何う出前講座といった展示・教育普及活動でご紹介してきました。本展では、今後の教育普及活動の充実も視野に入れ、教科書に掲載されているけれど館外へ持ち出しにくい民俗資料をピックアップし、3D撮影を行いました【画像5, 6】。ワラ製品などの細かい部分、ガラスの撮影など技術的には3D化がまだ難しい部分もありますが、3D撮影による立体的な資料のデジタルアーカイブ化は、今後の民俗資料の活用方法のひとつとしても注目されています。



画像5 民具の3D撮影  
(2025年9月1日撮影)



画像6 民具の3D撮影  
(2025年9月1日撮影)

## ▽民具の壊れ方

生活の中で手に取って（あるいは背負って、または足に踏まれて…）使用される民具は、壊れることを前提に作られます。残念ながら時に破損してしまう民具。日常生活では、使用できなくなった民具は捨ててしまうことが多いものです。しかし、壊れてしまった民具にも情報は詰まっています。壊れ方にも、種類があり、特徴があります。触る、使用することで壊れてしまうもの、材料の特徴によって、経年劣化でこわれてしまうもの、自然災害による破損、そして、使用しないことで壊れてしまうもの…本展では、民具の壊れ方をご紹介します。

## ■註

- 1) 神奈川大学デジタルアーカイブ、常民研刊行物データベース内、シリーズ 03. アチックミュージ엄ノート、書名 07. 『民具蒐集調査要目』より（[https://www.i-repository.net/il/meta\\_pub/G0000723.jmpapers\\_53162](https://www.i-repository.net/il/meta_pub/G0000723.jmpapers_53162) 2025 年 9 月 2 日最終閲覧）
- 2) 日本民具学会ホームページより（[https://mingu-gakkai.com/seimei\\_20240718.php](https://mingu-gakkai.com/seimei_20240718.php) 2025 年 9 月 2 日最終閲覧）

## ■主な参考文献

アチックミュージ엄編 1936 『民具蒐集調査要目』

岩井宏實 2000 「民具」 福田アジオら編 『日本民俗大辞典 下』 吉川弘文館

岩井宏實監修、工藤員功編 2008 『絵引 民具の事典』 河出書房新社

加藤幸治監修、武蔵野美術大学民俗資料室編 2022 『民具のデザイン図鑑ーくらしの道具から読み解く造形の発想』 誠文堂新光社

国立民族学博物館監修、日高真吾ら編 2025 『民具のミカタ博覧会 見つけて、みつめて、知恵の素ーデザインから読み解く、日本と世界のくらしの造形』 誠文堂新光社

独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所無形文化遺産部 2024 『第 18 回無形民俗文化財研究協議会報告書 民具を継承する 安易な廃棄を防ぐために』

日本民俗学会編 1997 『日本民具辞典』 ぎょうせい

（史料学芸部 学芸課 学芸員 森戸日咲子）

## 「書状（松岡表安否伺）」「高橋渡肖像」

「常陸松岡中山家中 高橋家文書」は茨城県高萩市下手綱高橋家より、昭和 53 年（1978）2 月に当館に寄贈されたものです。中山家は、徳川家康が幼少の末の男子である頼房を藩主として水戸藩を創設した際、附家老として特別に任ぜられ、代々世襲でこの重職を務めてきた家です。中山家は幕府との連絡、藩政の指導監督などを行うなど、他の家老らとは別格の立場にたち、本藩の中にありながらも、独自に召し抱えた家臣や屋敷（江戸・水戸）を持ち、二万五千石の知行地の行政支配を行っていました。本文書群の原蔵者である高橋家は、この中山家の家臣です。高橋家については、旧当主高橋佑著「水戸藩で活躍した薩摩人 日下部伊三治」（『ゆずりは』第 7 号、高萩市文化協会編）によると、

「高橋家の昔は無名微禄の土であつたらしい。その証拠には高橋の家は藩士屋敷の最末端町屋との境にあつたという木戸門の所に建っている。また中山氏と家臣たちの墓所である赤塚にある高橋家の墓は、狭い土地に四代ほどの小さな墓標が並んで立っている。私から数えて四代前から八代前でありその先は全く分からない。」

とあります。しかし、この微禄の家としてスタートした高橋家に、天保元年（1830）、婿養子として入った善衛門（種英のち渡と改名）の時、高橋家は維新の激動の中にあつて、変革期の中山家政に大いに寄与することになるのです。

善衛門の実父である海江田（日下部）連は、江戸薩摩藩邸副留守居役でしたが、故あり脱藩して海路川尻浜に上陸し、転々と茨城北辺に隠棲し、各地で私塾を開くなどしていました。やがて優れた文武の才を知られ、天保 8 年 9 月、徳川斉昭の命で創設された藩校太田「益習館」の館長として招聘されました。連は中山家の御殿医である山縣氏の娘たかを娶いましたが文化 9 年（1812）27 歳で先立たれ、後妻に山部村の樫村昔行の娘を迎えています。

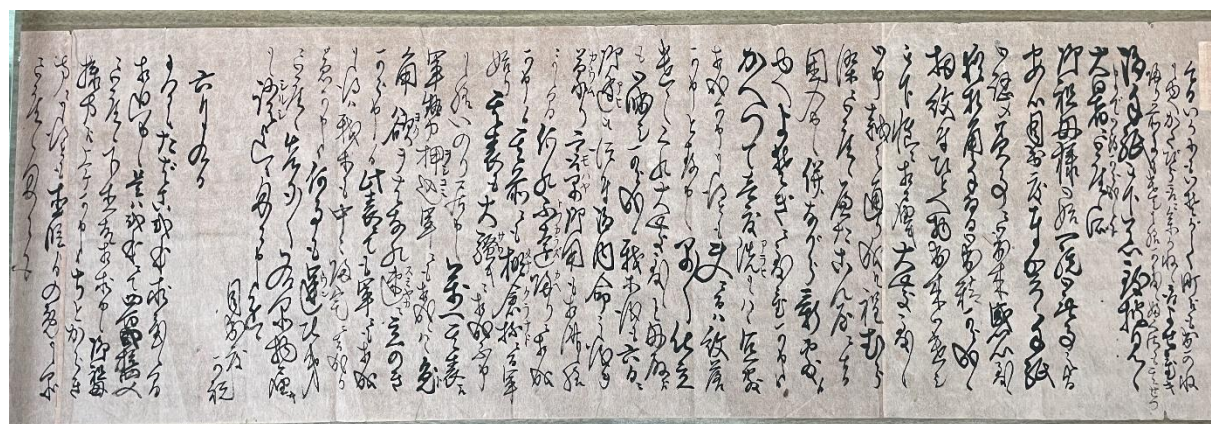
善右門衛の兄である長男の日下部伊三治は天保 11 年、父連の没後益習館の幹事を務め、安政 2 年（1855）6 月正式に館守に任命されています。しかしその年の 12 月には薩摩藩に復帰、その後尊王運動に奔走し、のち戊午の密動に関わり、息子の裕之進とともに安政の大獄で処罰されています。日下部家は薩摩藩という他藩の者ではありながら、水戸藩郷校の館主を務めるなど、その力量と地位を認められた家であつたのだろうと想像されます。<sup>1)</sup>

善衛門は連の三男で、天保元年、中山家中の高橋家に婿養子に入りました。善衛門は、慶応 2 年（1866）7 月吟味役会計主任、慶応 4 年 1 月に中山氏が大名に取り立てられて水戸藩より独立し松岡藩として立藩すると、同年 8 月松岡藩郡奉行となり、明治 2 年（1869）2 月には職名改正があり、司農知事となります。<sup>2)</sup>

なぜ高橋家は善衛門の代になり、急にこのような重職を命ぜられるようになったのでしょうか。一つは幕末期、各藩が藩政改革を行う中、身分に関わりなく有能な人材登用の必要性から拔擢されたものと見るができます。中山家は家臣を 100 名程度抱えるのみの家だったため、家臣一人一人が様々な業務について兼務せざるを得ず、そのためマルチタスクが可能な有能な人材を必要とし、登用したと考えられます。

もう一つは善衛門と薩摩藩とのつながりです。慶応4年（1868）1月、鳥羽・伏見の戦いが始まり徳川慶喜は大坂を脱出して江戸に去り、「朝敵」となる中で、朝廷は同月24日中山家ら御三家の附家老に対し、大名に取り立てる旨通達しました。松岡藩となった中山家中は、水戸藩のように党派に分かれ最後まで争いを続けることなく、特に混乱もなく藩論を一致させ、いち早く新政府側につくことができました。このスムーズな動きの背後には、善衛門と薩摩藩関係者との維新前からの交流、彼のもつ、維新政府キーパーソンとの縁戚関係や人脈、それにより得られる情報面が松岡藩首脳部の折々の判断の一助となり、その生き残りに有利に働いたとも考えられるのです。<sup>3)</sup>

今回紹介する史料は、幕末維新の混乱期にあっても家族への心配りをし、善右衛門の人柄を感じられる、嫡子千之允に宛てた書状です。



「書状（松岡表安否伺）」（高橋家文書No.434）全文

御手紙被下着致披見候  
大暑二御座候所、  
御祖母様御始一統御無事之旨  
安心目出度奉賀候、手紙  
御認メ美事二御出来感心致候  
猶折角手習御出精可被成候  
扱紋付ひとへ物出来御遣シ  
被下、慥二相届キ大慶致候  
御申越之通り、成ル程むら  
染二御座候、へたこん屋二は  
困入申候、併ながら新敷候  
ゆへ、よそぎ二取置可申候  
かへつて壺度洗候ハバ宜敷  
相成可申候得とも、夫二而ハ紋落  
可申と存申候、早々仕立  
遣しくれ、大慶致候と母殿え  
も御咄シ可被成候、我等儀も六日二

御逢被仰付、御内命之儀ヲ  
蒙り、最早御用も相済候様  
ニ候間、何れ不遠歸りニ相成  
可申候、其前ニも棚倉杯ニテ軍  
始り、其表も大騒ぎニ相成不申  
候様いのり居申候、万一其表え  
軍勢押込、軍ニも相成候ハバ、兎  
角欲ヲはなれ、速ニ立のき  
可被申候、此表ニても軍ニも相成  
候得ハ、我等も中々帰宅ニは成り  
兼可申候、何事も運次第  
ニ御座候、先ツ／＼右品物届キ  
候証迄ニ多々申進候

目出度可祝

六月九日

手紙の前半は、国許から届けられた紋付単衣の礼状です。しかし、送られてきた紋付単衣は「むら染」<sup>4)</sup>であると言ってくるように、「成ル程むら染ニ御座候、へたこん屋には困り入り申し候」と返事を返しているのが愉快です。また、紋付きの単衣を仕立てたのに、「かへって一度洗候ハバ宜敷相成可申候得とも、夫ニ而ハ紋落可申と存申候」というのですから困ったものです。とりあえず新しいものなので「他所着（よそぎ）に取り置き」といって続けます。

さて、この書状はいつ書かれたものなのでしょうか。結論から言えば、この書状は慶応4年作成の可能性が高いと考えています。手掛かりは6月9日という日付と内容です。

とくに注目すべきは、書状の中で、こちらでの御用は済んだので、まもなく帰れるとは思いますが、その前に「棚倉杯ニテ軍始り、其表（松岡）も大騒ぎニ相成不申候様いのり居申候」とあることです。中山家の領知である松岡と目と鼻の先の棚倉で戦が始まりそうだと伝えているのです。

慶応4年4月、奥羽越列藩同盟が成立し、東北での戊辰戦争が始まりました。東軍の一大拠点である白河城の争奪戦のため、5月29日、江戸から陸路により土佐藩先頭兵団が白河に到着、6月6日にも薩摩藩兵が加わり、さらに13日は、薩摩藩兵407名、大村藩兵142名、佐戸原藩兵などが品川港から平潟港に向けて海路出発しています。<sup>5)</sup>

一方慶応4年3月、松岡藩主となっていた中山信徴は、大総督府からの水戸藩内鎮定及び北越出兵についての内命を受けて江戸から水戸に下向していました。藩主家族は江戸詰の諸士を従え既に江戸から松岡に下国していましたが、<sup>6)</sup>中山信徴は水戸に詰めていたため、この時善衛門は藩主とともに水戸に滞在していたと考えられます。以上これらの状況から、この書状は慶応4年に作成された可能性が高いのではないかと考えられるのです。

また、この書状には、漢字の何か所にフリガナが振ってあります。棚倉杯（タナクラナド）、大騒ぎ（サワギ）、押込（オシコミ）、兎角（トカク）、欲（ヨク）、速やか（スミヤカ）、運（ウン）、証（シルシ）という漢字にフリガナが振られています。宛先の千之允は安政元年生まれなので、もしこの年が慶応4年であるとするすると千之允は当時14歳でした。善衛門は

14歳の息子をはじめ、家族皆に心を配っていたのでしょう。

善衛門の兄、伊三治は尊王運動に奔走し、のち成午の密動に関わり息子の裕之進（善衛門にとり甥）とともに安政の大獄で処罰されています。兄がそのような活動をする中、国許の家族らに、「万一其表え軍勢押込、軍にも相成候ハバ、兎角欲をはなれ速ニ立のき可被申候（逃げるように）」と助言する姿はとても対照的なような印象を受けます。

また同じ頃、奥羽越列藩同盟が成立する中で、近くの二本松藩や会津藩などでは千之允より更に幼い12、3歳の少年が戊辰戦争で戦い、城とともに討死、自刃をしています。<sup>7)</sup> そんな時代に、命を大切にしよう論す姿と同時に、自分らも戦が起こればなかなか国に帰ることもできず、「何事も運次第ニ御座候」と達観する姿勢をみせている彼の態度、家族を案じる書状をこうして今日にすることができるのは非常に興味深いことです。

書状には追伸があります。祖母様（善衛門にとっては義母）に、たばこを2本買い求めたので送るとあります。

江戸時代には煙草は武士・町人問わず広く嗜まれていました。刻み煙草を使い、煙管で吸うスタイルが一般的ですが、煙草の葉の生産地や加工法によって銘柄が存在し、価格や香り、刻み方の違いでランク分けされていました。2本で424文とありますが、「下値故」求めたとあります。

善衛門は味見をしてみたのでしょうか「ちとからき方」と述べています。義理の母にも気を遣う婿殿の姿に微笑ましくなります。

（追伸）  
尚々たばこ式本求置候間  
相廻申候、是ハ式本ニテ四百式拾四文  
ニ御座候、下直故相求申候、御祖母  
様方え上ケ可申候、ちとからき  
方ニ候得とも、直段よりのめ申候品  
ニ御座候、多々以上

さらに書き加えた追伸によると、善衛門は町にて「かたびら」も探し求めていたようです。「かたびら」とは単衣の夏用の裏地のない着物で、武家女性のおしゃれ着としても使用されているほか、武士・町人・女性・子ども問わず、日常着ともなっていたものです。

「取よせ置き、帰り前にも遣シ申様可致候」

と述べているので、自分用ではなく家人用のものと分かります。町では「下手紺屋」ではなく上等なものが手に入る可能性があるので、家人のために良いものを探そうとしていたのかもしれない。

今日いかにもいそがしく町えも出かね  
候ゆへ、かたびら取ニ参かね候、取よせ置キ  
帰り前にも遣シ申様可致候、ふくさも其せつ  
まで御待可被成候、以上

善衛門は明治2年9月「渡」と改名しました。近代的な名前に変えた、と思います。これからの世を渡っていくために、その強い意志を名で示したのか、とは考えすぎでしょうか。最後に彼の肖像画が残されているので紹介します。穏やかで柔和な姿です。高橋家文書は当館閲覧室でご覧になれます。どうぞご利用ください。

(一部写真版のみで閲覧)



「(高橋渡肖像)」(高橋家文書No.1591)

#### ■註

- 1) 「日下部伊三治」「ゆずりは」7号(高萩市文化協会)
- 2) 高橋家文書 No.611「(高橋善衛門略歴)」
- 3) 同上「ゆずりは」によると、伊三次の娘松子は桜田門外の変に参加した有村次左衛門の兄の兼俊を婿養子に迎えた(後に海江田信義と改名)。その娘テツ子は東郷平八郎と婚姻している。テツ子にとって善衛門は大叔父にあたり、その関係で両家は親しく行き来していた。高橋家文書No.79「(日用記)文久二年」には、江戸出張の際に善衛門が薩摩藩邸に出向いている記述が見える。
- 4) ここでいう「むら染」は意図的に出された手染めの風合いを指すものではなく、善衛門が「下手紺屋」と述べていることから、染料の濃淡や入り方が均一でない染めの様子を指していると思われる。
- 5) 『いわき市史』第2巻 近世 837頁 白河城を廻る争奪戦において棚倉の町は戦場となり、棚倉城は慶応4年6月24日に落城、7月1日、13日と磐城平町も攻撃され平城も落城した。磐城地方の戦闘において主力は薩摩藩兵だった。

- 6)『水戸藩史料』下編 全 1148 頁 慶応4年(明治元年)6月、中山信徴は大総督府より国内鎮定及び北越出兵につき内命を受け水戸藩に伝えている。藩主水戸下向に関するの記事は『高萩市史』上 720 頁「慶応四年辰御用留」による。
- 7)『二本松藩史』211 頁 第8章二本松方面の戦(5)「少年隊勇戦附老人組の奮闘」によると、慶応4年7月29日、二本松戦争において家老以下94名が死亡した。少年は当初15才以上が隊伍に編入するとしていたが、隠居老人が出陣するとなり、15歳以下の少年らも従軍を志願した。少なくとも戦死者の名簿には51名の少年の名を確認することができる。

(史料学芸部 歴史資料課 研究員 沼澤佳子)

## 令和7年度 上半期の教育普及事業

### ■日曜歴史館

上半期は、当館職員・外部講師による3つの講座を開催し、多くの方々にご受講いただきました。第4回以降も受講者を募集しております。詳細は、ホームページ「日曜歴史館」をご覧ください。

第1回（6月8日） ある戦国武将の従軍記録—『上井覚兼日記』の世界—

東京大学大学院総合文化研究科教授 桜井 英治 氏

第2回（7月13日） 秋田藩家蔵文書と家譜編さん

当館 山縣 創明

第3回（9月7日） 〈アーカイブズの部屋関連〉茨城の鉄道

当館 富田 任



### ■歴史館まつり（5月31日・6月1日）

今年で第30回となる歴史館まつり。県内各地からたくさんの方にご来館いただきました。1日目は雨に見舞われ、中止となるイベントもございましたが、2日目は予定通り開催することができました。歴史館ならではの、よろいかぶと体験や和綴じ本体験、展示解説など歴史に親しむイベントを多数開催しました。

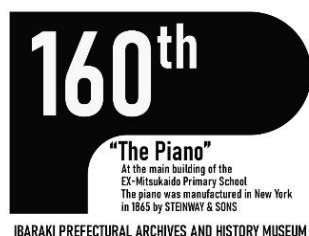


## ■こどもの歴史くらぶ「〈戦後 80 年〉戦争体験をきく座談会」（6 月 7 日）

昔のくらし「戦後 80 年 くらしの中にあつた戦争」の関連イベントとして、小中高校生を対象に開催しました。35 名の参加者は、少人数のグループに分かれて、戦争体験者の方から戦時中、戦後のお話を聞きました。



## ■いにしへのピアノ 160 年記念イベント



旧水海道小学校本館のピアノ室で保管している「いにしへのピアノ※」が、今年製造から 160 年となることを記念して、様々なイベントを開催します。

※ Steinway&Sons（スタインウェイ&サンズ社）が慶応元年（1865 年）に製造、平成 2 年（1990）から 3 年（1991）にかけて修復

## ▽春の歴史館コンサート（5 月 4 日）

旧水海道小学校本館にて、平尾有衣氏によるピアノコンサートを開催しました。35 名の参加者は、いにしへのピアノの音色に聴き入っていました。

## ▽春のいちよう並木ストリートピアノ（5 月 4 日）

当館庭園のいちよう並木に設置したピアノを誰でも弾くことができるイベントです。昨年に引き続き、3 回目の開催となりました。たくさんの方に、新緑のいちよう並木とピアノ演奏をお楽しみいただきました。さらに、ゲスト演奏として、平尾有衣氏のミニコンサートを開催しました。

## ▽いにしへのピアノ演奏体験（6 月 15 日）

いにしへのピアノを弾くことができるイベントです。20 名の方がいにしへのピアノで演奏しました。プライベートな空間で演奏をお楽しみいただきました。



各イベントについてのお問い合わせは、

**茨城県立歴史館 教育普及課 、TEL：029-225-4425**

または、ホームページの「お問い合わせ」からメールをお送りください。